

## Zora Neale Hurston 研究 ——*Moses, Man of the Mountain* について

前 川 裕 治

A Study of Zora Neale Hurston: *Moses, Man of the Mountain*

Yuji MAEKAWA

### Abstract

“John Redding Goes to Sea” marked Zora Neale Hurston’s start as a writer from Eatonville. The “lying session” on the front porch of Joe Clarke’s store in Eatonville is one of Hurston’s most important experiences. Just like John Redding and Isis, Hurston leaves the limited, small world of Eatonville for the north, where she enjoys the brightness of the big cities. Even in the north, however, she does not forget what Eatonville gave her. In fact, she brings Eatonville to life in her short fiction, and then in *Jonah’s Gourd Vine* and *Their Eyes Were Watching God*. In these works she describes the everyday lives of Black people in their own words, which, she believes, can best represent Blacks’ authenticity. For that reason she does not describe Black-white conflict, or put white characters at the center of her works. But in *Moses, Man of the Mountain* she leaves Eatonville for Egypt, and describes Moses, Hebrews, and Egyptians instead of Black people. How does she try to express the spirit of Eatonville in this new world?

### 1 は じ め に

Zora Neale Hurston は “John Redding Goes to Sea” で作家として Eatonville を出発した。Eatonville は彼女にとって、精神的には大切な故郷であった。彼女の育ったその町の中心にあった Joe Clarke の店先で繰り広げられる “lying session” は、作家 Hurston を形成して行く上で、極めて重要な経験であった。しかし、John Redding や Isis と同じように、Hurston は限られた Eatonville の世界からの脱出志向が強く、母 Lucy の言った “Jump at de Sun” の

言葉を実践するために Eatonville という田舎を後にし、北部へと出て行く。北部での生活は Eatonville と違い華やかなものであったが、作家としての修行時代、Eatonville で暮らす中で培った精神的支えは決して萎えることはなかった。まず、短編で Eatonville を蘇らせ、長編の *Jonah's Gourd Vine* や *Their Eyes Were Watching God* でも、Eatonville と離れることはなかった。これらの作品の中では、Eatonville という地理的背景を使いながら、黒人生活の中で代々口伝えによって実践されている黒人の日常性が描かれていた。黒人大衆の生活の中にこそ黒人の本当の姿があるという信念が、彼女の中にあったからである。そのため、彼女の作品では黒人と白人の対決する場面が描かれることは少なかったし、白人も作品の中心に出て来ることもなかった。しかし、*Moses, Man of the Mountain* では、彼女の世界は一変したかに見える。地理的には Eatonville を離れて、エジプトを出発点に、イスラエルに向かう Moses と Hebrew の世界が描かれる。新しい背景を使う中で、彼女が今まで大切にしていた Eatonville の魂はどのように表現されて行くのか。*Moses* では、彼女が今まで歩んで来た道はどのように表現されているのかを見て行きたい。

## 2 作品の周辺

*Moses* は1939年11月、Hurston が North Carolina College for Negroes at Durham で drama instructor として働いている時、出版されている。この作品への構想は、それ以前から持っていた。まず、1934年9月に彼女は *Challenge* に “The Fire and the Cloud” を掲載している。これには、*Moses* の最後の部分の Mt. Nebo で lizard と対話して Sinai に向けて Moses が去って行くところが描かれている。表現の違いはあるが、内容はほぼ同じものである。役割を終えた Moses が Jordan 川の手前の Moab 平原に Hebrew 人達を残して去って行こうとしているところである。更に、1935年には、Rosenwald Foundation をもらって、Columbia 大学で anthropology で Ph.D. を取るために、研究に従事し、その間に *Moses* の原稿を書き、Lippincott 社に送っている。このことは、Osgood に送った Hurston の手紙から、確認することが出来る<sup>1)</sup>。その後、folklore 収集のために Haiti に行き、ここで Moses が黒人の中では大切な存在であることを確認し、*Moses* への構想が深まったものと思える。Haiti には、更に、1936年9月に再び訪れ、1937年3月まで滞在している。また、1936年には Guggenheim Fellowship をもらって、West Indies での folklore や hoodoo の研究を行うために、同年の4月から9月にかけて、Jamaica に滞在している。これらの滞在の後、彼女は *Tell My Horse* 用の資料を整理し、1938年に出版している。Haiti から帰国後、彼女は WPA の Florida Writers' Project に加えられ、黒人の間に伝わる Moses 像をじっくりと考察する時間

が持てたのである。

*Tell* によると, Haiti には2種類の神 (deities) がいるということである。一つは Rada (or Arada) でもう一つは Petro である。Rada はいわば “good” gods で Petro は evil work をする gods だと言うことだ。Damballah が Rada gods の頂点に立つ神だと考えられている。この Damballah と Moses は Haiti や南部アメリカ, West Indies では、同じ人物だと考えられているのである。

All over Haiti it is well established that Damballah is identified as Moses, whose symbol was the serpent. This worship of Moses recalls the hard-to-explain fact that wherever the Negro is found, there are traditional tales of Moses and his supernatural powers that are not in the Bible, nor can they be found in any written life of Moses. The rod of Moses is said to have been a subtle serpent and hence came his great powers. All over the Southern United States, the British West Indies and Haiti there are reverent tales of Moses and his magic. (Hurston: 1938, 116)

同じように, *Mules and Men* の中でも, Hurston が New Orleans で hoodoo の調査をしている時, 人々の間に Moses が存在していることを知ったと説明している。Moses が神の力を得た最初の人で, Jethro を通して hoodoo 的力を学び, Pharaoh を滅ぼして行くと言う, *Moses* に描かれた概略と言えることを述べている。(Hurston: 1935, 184-85)<sup>2)</sup>

奴隷として人間性を否定され, 動物と同じ扱いを受けて来た黒人の中に, 絶えず exodus の願望があったことは当然である。現実には地下組織を造って, 逃亡奴隷を援助し, 北部やカナダへの逃亡を推し進めた Harriet Tubman も, 女性ではあるが, Moses として尊敬されていた人物である (Sarah Bradford)。

一般黒人の場合, 解放と宗教的見地から Moses への関心が強かったことは納得出来ることである。1930年代には, 一般に, Moses への関心が高まったようである。

In recent years especially there has been an avalanche of biographical material dealing with the life and the ethical teachings of this great prophet. Sigmund Freud's recent work, *Moses and Monotheism*, attracted considerable notice. Biographies of Moses have been written by Louis Untermeyer and Edmond Fleg. A number of years ago a German, Werner Jansen, devoted a book under the title *The Light of Egypt* to a study of Moses. Last year Louis Golding, the brilliant novelist, wrote two travel books, *In the*

*Steps of Moses the Conqueror and In the Steps of Moses the Lawgiver.*

From the Jewish point of view, the most significant of all studies of Moses continues to be the brilliant essay by Ahad Ha'am (Asher Ginzberg). (Slomovitz, 1504)

Slomovitz は上の説明で6人の Moses 研究家の名前を挙げている。その他, Roark Bradford が *Ol' Man Adam an' His Chillun* という子供向けの本で, やさしい言葉で簡潔に聖書を説明しているし, Marc Connelly はこの本を基にして *The Green Pastures* という黒人 Moses の戯曲を書いている。

Hurston がこの傾向を意識していたかどうかは分からないが, 彼女の *Moses* は, Freud が Moses の身元の謎の解明に焦点をあてたように, Moses を Hebrew 人とする従来の堅固な見方に疑問を投げかけることを出発点としている。また, Connelly が *Ol' Man Adam an' His Chillun* を基に戯曲を書いたのと同じ語り直しと言う方法を採用し, パロディ的な作品に仕上げている。

作品では, 「黒人」と言う言葉は一度も使われることはない。しかし, 基本的には, 聖書の枠組みと内容を使いながらも, Moses を中心にした作品の世界のベースが, 黒人であることは明らかである。例えば, 全体的に見ると, 語りの調子を使って読者に語りかけていること, 黒人英語を民衆の使う英語として登場人物に喋らせていること, Moses が繰り返す言葉, 行動は明らかに黒人の説教師が頻繁に使う繰り返しの手法を思い出させること, 場面の設定も暑いエジプトの夏と南部の暑さとは容易に関連させることが出来ることなどである。具体的に, Mentu と言う, 昔の知恵を身につけている人物や magic power を使う Moses の潜在的力は, 明らかに, African American を意識した描写であり, Moses が宮殿に行って Pharaoh や priest 達との間で行くことを説明する時の説明の仕方及び, その内容は, folklore が黒人の間で代々伝えられた説明の仕方であり, 内容なのである。こう言った “distinctive Negro folk flavor” (Howard, 116) をふんだんに取り入れることによって, 基本的に黒人の体験と Hebrew 人の体験は parallel だと言う暗示を狙っている。

*Moses* に対する評価は分かれている。否定的評価の中でも最も手厳しいのは Ralph Ellison で, *New Masses* の中で, “for Negro fiction it did nothing” (Ellison, 24) と全面的に *Moses* を否定している。Louis Untermeyer も *Saturday Review of Literature* で全体的には失望する作品として, “the total effect was disappointing” (Untermeyer, 11) と言っている。技術的面で, allegory が成功していないために, “generally weak, stereotyped characters” (Weidemann 312) と言うことを否定的批評の根拠に Weidemann はしている。また, McDowell は “black dialect, colloquial English, and biblical rhetoric” がうまく噛み合っ

いない (McDowell: 1988, 164) と言語使用の面を否定的見解の根拠にしている。Locke は “characterization”<sup>3)</sup> と “dialogue” に不満があり, “not genuine folk portraiture” と手厳しく, このため “lacking the vital dramatization” だと言い, 結果的に “caricature instead of portraiture” (Locke, 7) と, 小説としての価値をあまり認めていない。 “If she had written nothing else Miss Hurston would deserve recognition for this book.” (Turner, 109) と肯定的に評価する言葉を使っているが, 作品の全体の出来と言う点では, Turner も同じことを言っていて, 作品が comedy 的になっていることを指摘し, それがために, 読者にはおもしろいだろうが, “not comment significantly on life or people” (Turner, 111) と characterization に comedy 的調子が邪魔をしていると言っている。Slomovitz は Moses の役割を Hurston が誤解していると読んでいるようで, Moses は lawgiver なのに, voodoo man として描いてあるところを批判して, “weak in its interpretation of the ethical contributions of the prophet and its treatment of the code of laws handed down by him.” (Slomovitz, 1504) と言っている。実は Hurston 自身も, 作品の完成には苦勞したようで, 1935年12月29日に Osgood に出した手紙の中で, 次のようなことを言っている。

I have the feeling of disappointment about it. I don't think that I achieved all that I set out to do. I thought that in this book I would achieve my ideas, but it seems that I have not reached it yet but I shall keep trying as I know you want me to do.  
(Hurston's letter to Grover Osgood: December 29, 1935)

肯定的評価をしている批評家の中でも, 最も代表的な人物は Blyden Jackson である。Jackson の評価は聖書の世界と黒人の世界がうまく重ね合わさっていて, 普遍性が出ていると言うことである。

... her novel, in dissolving itself within a main stream of Western tradition, gives pleasing evidence that a transcript of Negro life need not be parochial, but may anchor securely its substratum in the universal mind. (Jackson: 1953, 107)

Ann Rayson も *Moses* に普遍性が出ていると言う評価をしている。彼女は R. Bradford や Connelly とパロディと言う角度から比べながら, 自然に無理なくパロディ化が行われていて, Moses の “cross-cultural significance” を出すことに成功しているため, characterization が不自然でなくなっていると言う (Rayson, 5)。Howard も “the most intriguing and am-

bitious of the Hurston works for it combines fiction, folklore, religion, and comedy in a daringly provocative, unusual manner” (Howard, 113) と最高の賛辞を送っている。Carl Carmer も “uncommon gifts as a novelist” として Hurston の作家としての才能を認め, “characterization” も成功していると言っている (Carmer, 5)。Hutchison は “the narrative becomes one of great power” とし, “Her home spun book is literature in every best sense of the word” (Hutchison, 21) と称えている。Turner は “satire, irony, and dialect” (Turner, 109) をうまく使う Hurston の才能をほめている。Hurston の伝記を書いた Hemenway は, 一方では Howard のように “most ambitious book” と言いながら, 最後に, “a noble failure” (Hemenway, 270) として, 狙いは分かるが, 必ずしも成功はしていないと言っている。

このように, 評価に関しては, Hurston の作家としての才能は共通して認めても, また, 全体的には評価しても, 技術的な面 (例えば, 言葉の使い方, characterization などの面) に関しては評価は分かれ, 未だ定まった評価は得られていないと言えよう。

### 3 心を囚われた人達

聖書に描かれた Moses と Hurston の Moses の大きな違いは Moses の身元に関する記述である。聖書では, 出生そのものに関する描写はなく, 『出エジプト記』を始めとするいくつかのところで, 間接的に彼が Hebrew 人であると言う説明がなされている。それに対し, Hurston は, 作品の冒頭に Moses の出生に関する描写をしている<sup>5)</sup>。赤子の Moses は, Assyria に嫁に行っていた Pharaoh の娘に拾われ, エジプトの社会に入っていく。Hurston の第2の狙いは, 無垢な赤子の Moses がエジプト社会の中に入り, 成長して行くことにある。おそらく, 彼は王の娘の子供として, 特別なエリート教育を受け, 将来の, いわゆる, 将軍として大切に育てられた筈である。「おそらく」と記したのは, Hurston は Moses の出生に関する描写はしていても, Moses のエジプト宮殿での教育のされ方, また, 全般的に成長のプロセスなどの描写を, 詳しくはしていないからである。しかし, それを描かないことによって, Moses がエジプト的枠組みの中で育って行ったと言うことが, 暗黙の内に伝えられているのである。このことは, Moses が成長し, 戦闘に参加する年齢になって再登場し, Mentu という馬丁からの教えを受けたとは言え, 戦う人として描かれていることが物語っている。他のエジプトの指導者と異なる資質を持っていると周りの人々から見られていたとは言え, 彼の成長の仕方はエジプトの王族のそれそのものなのである。

例えば, 彼は, いわば, 出戻りの王の娘の子供のため, 確固たる信頼を得ていなかったが,

戦いに勝利することで信頼を獲得して行く。王の息子との演習での勝利にしても、その後の他国との戦いにしても、彼の信頼は力により相手を負かすことで得られている。また、彼が力を得て行く描き方にしても、一方的に勝利したことを、単に記録として報告するかのような描き方がしてある。彼の戦いに関して、相手との戦いの場面は描かれることはない。即ち、勝者の論理によって彼の勝利が「報告」されているのだ。しかも、戦闘での勝利を重ねて行くことで、勝者としての力を得て行く彼を象徴するのは、いわば、戦利品として Ethiopia の王の娘を妻として迎えていることである。彼女が彼の妻であることは、彼が力によって信頼を得たことを、最も顕著に物語っているのである。

エジプト社会の精神構造が明確に示されるところは、Moses が Hebrew 人達を解放するために宮殿に行って Pharaoh と対決する時である。神の力を得ていた Moses にどんな手を使っても太刀打ちできないと分かって来ると、Moses に地位や財産を与えることで、解決の道を探ろうと Pharaoh はするのである。Pharaoh だけでなく、Pharaoh の知恵袋である priest 達も、Moses に対抗するために考えることは、物で Moses の心の変化をさせることなのである。彼らは、物事の判断基準が地位や名誉欲、支配欲と言ったものに、がんじがらめになっていて、Moses の真意である心の充実と言うことに気が付き得ないのである。

エジプト社会は男による、力による支配社会なのである。戦争をし、周囲の国々を力によって打ち負かし、国力を誇示することで自己の存在感を認識すると言う構造の社会なのである。その存在感を守るために次の戦争をせざるを得なく、無限に力による戦いの論理を続けなければならない状態にあるのだ。エジプト社会が男社会であることは、エジプト女性が殆ど描かれていないことから分かるし、ただ一人、目立つ形で描かれる Moses の宮殿での母は、王の娘であっても、息子の Ta-Phar と比べて、口出しをすることは許されないのである。戦争や演習の場面に限定したエジプトの社会の描写は、女が完全に社会の隅に追いやられていることを暗示している。隅に追いやられた女の役は、“a passageway for boy children” (Hurston: 1939, 53) だけなのである。

男性の造った男性社会規範である“patriarchal rule” (Smith, 28) に則って動いている社会は、歪みを造り出し、本来の人間の姿を奪い、人間が自然な形で生きることを阻んでいるのである。それが明確な形で表されているところは、Hebrew の女性が自然な形で子供を生むことを禁止されているところである。彼女達は、雌雄の生み分けを強いられる動物と同じように扱われ、“the status of animals” (Royster, 113) の状態を強要されていると言うことが出来るのである。

エジプト社会は、恣意的な偽りの社会であると言える。自己満足的で、自分のためになることは全て都合よく歪めてしまうのである。priest 達が magic をするための仕掛けを造ること

も、権力を保持するための行為であるし、Moses が実は Hebrew らしいと言う噂を流す Ta-Phar の狙いも、演習で敗れ、自分の Pharaoh の後継者としての地位を守るための策略なのである。宗教も彼らにとっては自分たちに有利な状況を造り出すための道具なのである。priest 達は型式にのみ囚われ、本来の宗教のあるべき姿を失っている上に、金のためなら何でもすると言う恣意に満ち満ちているのである。Pharaoh も自己権力と支配力保持のために「神」を利用することにためらうことはないのである。

このようにエジプト社会は、人間の心に関する関心は殆どなく、自らの満足を最優先する社会なのである。そのため、人間同士の心の繋がりはなく、信頼の上に立った人間関係は存在せず、不信と疑心に満ちた社会であったと言える。だから、彼らは支配者側に立ちながら、実は、心が支配された状態にあったのである。

Smith は Miriam について、“There is the implication that because Miriam is exceptional, not conforming to the traditional female role, she is destined to be unhappy.” (Smith, 28) と言っている。Smith が “traditional” と言う時、女の役割は “a passageway for boy children” になっていると言うことを意識してのことである。確かに Miriam にはこの意味では伝統に従った女ではなかったと言えるが、彼女がこのようなタイプの女にならなかったのは、彼女の中に別のエジプト的な価値基準があったからである。Zipporah にしても、Moses の最初の妻の Ethiopia 王の娘にしても、エジプトの女にとって最大の幸福は、王の妻になることなのである。それが彼女の中にもあったことは、子供の Miriam が、ナイル川に籠に入れられて浮かべられている弟を見張っているように言われた時遭遇する、Assyria の王女の一団の華やかさに心打たれる描写を見ても分かる。語り手に語らせて、“The morning sun struck against shining metal ornaments and drew Miriam away from her search for her brother and from tired and frightened self.” (Hurstons: 1939, 40-41) と描写させていることに加えて、Miriam 自身の言葉で、“Royalty is a wonderful thing .... I wish I was one of those girls waiting on her[Princess], even.” (Hurstons: 1939, 41) と言わせていることでも、彼女の中にあったエジプト的基準が明確にされている。

彼女の中には、絶えず、外見的な美しさに囚われているところがあり、エジプト社会と同じく、自らの心の充実と言うことに関心を示すことはないのだ。このことを最も象徴的に物語っていることは、Moses の身元に関する彼女の嘘である。見張りをしていなければならなかったにも拘わらず、眠ってしまい、弟の入った籠を見失った Miriam は、母に責められ、次々と嘘を重ね、自分とエジプト社会との心の距離を狭めて行くのである<sup>6)</sup>。

彼女のエジプトへの羨望的親近感、黒人女性が伝統的に持っていた白人女性への尊敬の気持ち、即ち、“relevance to the way Black women have traditionally felt towards white



women” (Smith, 28) なのである。彼女の持つ意識構造は *Jonah's* の Hattie や *Their Eyes* の Mrs. Turner と同じものなのである (Turner, 109-10)。Hattie や Turner が奴隷制度の中で、白人的であることが正しいことだと言う考え方を持つに至ったのと同じように、Miriam の場合も、Royster の言うように (Royster, 118), エジプト社会が彼女を変えてしまったのである。彼女の中に Hebrew 人としての自らを否定的に見て、エジプト人的になりたいと言う、いわゆる、自己否定的意識構造があるため、絶えず、自らを否定することが出発点になるのだ。とりわけ、Moses の妻の Zipporah への彼女の妬みは、彼女の自己否定を如実に物語っている例である。彼女は自分が女予言者として、人々から一定の信頼を得ていると言う自らの良さに目を向けることが出来ないのである。

こういう面から、Miriam も心の自由を失っていたと言える。彼女は作品に登場する数少ない女性の一人で、しかも、女予言者と言う特殊な立場を与えられ、自己凝視の可能性を持っていたにも拘わらず、死に直面するまで、自らの内面に目を向けることはなかったのである<sup>7)</sup>。

Moses の兄にあたると思える Aaron もエジプト社会の論理で物事を考え、行動していたと言える。このことは、彼の場合も、子供の頃の描写が殆どなく、成長した Aaron の描写が中心になっていることからして、奴隷として Goshen に閉じ込められている間に、エジプト的な基準が自然に身に付いて行ったことを暗示している。彼の顔も歩き方も、Pharaoh のそのようであり、歪んだプライドと妬みに富んだ人物なのである (Hurston: 1939, 250)。エジプト的論理を持っている彼は、物や地位と言った外見的なものに囚われ、人間を階級や色で判断する傾向がある。彼のこう言った傾向は、彼の使う言葉の面からも説明することが出来る。自分を責任ある、信頼されるべき人物として見せようとする時、彼はエジプト語（ここでは大衆が使う方言的な英語でなく、標準的な英語と言うことになる）を使っている。何事をするにしても、絶えず下心を持っていて、自分の利益のためだけに行動する傾向が彼にはあるのだ。Hebrew を救うためと言って、人々の耳飾りを提供させて、the calf of gold を造るが、彼の狙いはこれによって人々の信頼を得て、自らの威信を高めることなのだ。彼には、人々との信頼関係を成立させる気持ちはなく、王と奴隷と言う力による上下関係にのみ関心がある。このことは、彼と民衆との対話が行われているにも拘わらず、いわゆる、call and response の滑らかで自然な対話になっていないことから分かる。

They[Hebrews] did not question too closely for proof. They wanted to believe, and they did. It kept them from feeling utterly vanquished by Pharaoh. They had something to cherish and chew on, if they could say they had a Hebrew in the palace. (Hurston: 1939, 50-51)

これは Moses が王女によって拾われたと言う話が Hebrew 達の間を広まって行くところを描写したものである。Miriam の嘘にしても、Aaron の気持ちにしても、エジプト社会と自分たちは“kinfolks” (Hurstons: 1939, 46), 即ち、血縁関係にあるのではないかと言う、いわば、歪んだ期待感が Hebrew 人達全体にあったのである。長年に渡って奴隷として Goshen に閉じ込められ、強制労働を強いられ、非人間性を象徴する男児出産禁止と言う制限を受けながらも、「血縁関係」にあるかも知れないと言う気持ちが、恣意的に嘘を真実に近付ける働きをしているのである。Moses に率いられてエジプトを離れた後、彼らの中には Moses の「力」に対する恐怖心が Pharaoh に対するそれと同じようにいつもあった。彼らと Moses との繋がりは、彼らと Pharaoh との繋がりと同じ図式で最初は成立していたのである。彼らが Moses を指導者として選んだことも、Pharaoh に対して力で対決しようとする意識構造が根底にあったからである。Pharaoh からの解放を望みながら、エジプト社会の論理で解放を考え、Pharaoh に代わる“forceful outside leader” (Wiedemann, 311) を期待していたのである。

エジプトの論理を基準とする傾向は、エジプトを離れる前から彼らの中には存在していた。若きエジプトの王子であった頃の Moses がエジプト人の foreman を殺した後、代わりに Hebrew 人が foreman になるが、彼らは同胞に従わなく、“I don’t intend to let no Hebrew boss me around .... He ain’t no better than I am.” (Hurstons: 1939, 94) と言うのであった。彼らの中にはこう言った“self-defeating attitude” (Howard, 123) があったのである。彼らのこの自己否定的態度は、エジプトを離れた後、何度となく繰り返される。途中、Pharaoh 軍が迫って来た時や荒野で食べ物に不満を感じる時、エジプトにいた方が良かった、エジプト人に支配されていた方が安心だったと思うのである。彼らには自分達は駄目な“grasshoppers” (Hurstons: 1939, 312) のような、弱小な存在だと言う気持ちが根強くあるのである。

彼らの最大の問題点は、支配されながら支配する側の基準に従っていたと言うことである。仮に、エジプトの神の Apis や Isis を信じていないとしても、彼らの中には目に見える形で神の存在を考える意識構造が形成されていたのである。即ち、彼らは、Miriam 達と同じように、心の根底部分では、自らの拠り所を持っておらず、内的に不自由な状態にあったのである。

#### 4 ヨルダン川を渡る資格

それまでエジプトのエリートとして順調な日々を送っていた Moses の中に、囚われ人としての姿が現れるのは、自分の身元について不安が生まれて来た時からである。

He felt lonely in the palace and he felt lonely in the camp. So he went to visit the tomb of Mentu the second day after the killing of the foreman. “Am I a Hebrew?” he asked himself there, but found nothing to convince him that he was. (Hurston: 1939, 92)

Hurston は身元と言う揺るがしがたいと思える、自分を決定する基準に衝撃を与えることで、今まで *Moses* の中にあった全ての基準に対して、見直しを迫らざるを得ない状況に彼を追いやっているのである。

Freud の研究によると、聖書の *Moses* は実在の人物で、エジプトの軍隊長だったと言う。(Freud, 15) Hurston の *Moses* の身元について、Hebrew と読んでいるのは, Hutchison (Hutchison, 21) で、Jackson は *Moses* の “Introduction” で、*Moses* のことを Assyrian, 即ち, Pharaoh の娘の生んだ子としている。(Jackson: 1984, xviii) その他の殆どの批評では、全て *Moses* のことをエジプト人として読んでいる<sup>8)</sup>。

作品を細かく読むと、Hurston は設定として *Moses* をエジプト人ではないかと読者に思わせる描写をいくつもしている。その第一が、Miriam の嘘であり、第二に Ta-Phar が噂を流したかも知れないということである。しかし、決定的に *Moses* が Hebrew 人だとか、エジプト人だと言うことを証明する記述はどこにもない<sup>9)</sup>。ここで大切なことは、Hemenway が言うように Hurston が *Moses* の仮面を剥そうとしている訳ではない (Hemenway, 258) と言うことだ。むしろ、それまで順調に生活をおくって来た筈の彼の中に、不安が生まれて来たと言うことが大切なことである。しかも、その不安は彼を決定する身元に関する不安であると言うことだ。即ち、彼は自分の内面に目を向けざるを得ない状況に追いやられていると言うことなのである。

自分の内面に目を向けざるを得なくなった *Moses* がエジプトを離れて “... saw that he had merely been suppressing himself during his military period.” (Hurston: 1939, 101) と回想したと描かれているように、自分がそれまで持っていたエジプト人としての生き方の基準である、戦いの論理とか支配の構図と言うものが、無意味なものであるにも拘わらず、それに従って生きて来たと言う現状を認識する方向性が出て来たと言うことである。この認識が Mentu や Jethro と言ったエジプト的基準を持たない人達と接することで、一層確かな形で、彼の中に形成されて行くのだ。

心を囚われた人達が心を解放する時のキーワードは “naked to their souls” (Hurston: 1939, 289) と言うことである。彼らの心は美しそうな装身具で着飾られていた訳である。美しそうな装身具とは、彼らが正しいと信じて疑わなかった価値基準なのである。それを捨て去

らせることが Hurston の狙いなのである。それは Moses なら軍隊長として、鎧兜や刀と言った外見的な装身具はもとより、彼の中にあるエジプト的論理であり、Hebrew 人なら “the calf of gold” や Apis や Isis と言う目に見える「エジプト」を始めとして、彼らの中にあるエジプト的な人や物が素晴らしく、Hebrew 的な人や物が劣っていると言う意識なのである。naked になって初めて、本当の自分を造って行ける可能性が生まれると言う信念が Hurston にあるのである。

偽りの自分を捨て去り、本当の自分を造って行くと言うことは、自分の神を持つと言う言い方でも表現されている。神から命を受けて、Hebrew を救出に来たと言う Moses は、神とは何だと聞かれた時、“I AM WHAT I AM” が神の言われたことだと答えている。“I AM WHAT I AM” とする神を信じると言うことは、本物の自分自身を形造って行くことを意味している。更に、Moses は次のように言う。

“This god never shows himself through any animal. He has no representation on earth in any form. He speaks in fire and smoke, but the fire and the smoke are not god. He has no images and wants none made in his name.” (Hurston: 1939, 174)

神は、一人一人の心の中に存在するもので、その人の心によって決まって来るものだということだ。それは、それぞれが自分自身の基準を持つと言う意味なのだ。そうして初めて、彼らは心を囚われた状態から解放することが出来るのである。

Miriam の心も解放されていなかった。成長した彼女は、エジプト的「美しさ」からは解放されているように見えるが、依然としてエジプト社会の論理に支配されている。それは「男のようになろうとした」と言う言葉で言い換えることが出来る。女子言者として成人となっている彼女の中には、男と同じように支配者になりたいと言う野心を持つようになっている。彼女について次のような描写がある。

What with her lack of female beauty did and female attractions, and her loveless life with one end sunk in slavery and the other twisted and snarled in freedom. (Hurston: 1939, 323)

Schmidt は、Moses は女を男の愛を従属的に受け入れ、家庭に閉じ込めておこうと言う “conventional female role” (Schmidt, 181) を Miriam に強制していると言う読み方をしているが、ここで大切なのは、Miriam の心の中に根付いていた基準を造り出したエジプト社会が男

社会であったと言うことだ。彼女の中に、男のように生きること、即ち、人間として生きていく時、男を一つの基準として生きようとしていたと言うことなのだ。そこには、女としての良さ、独自性と言った方向への目はなく、いかにして、男と同じように行動することが出来るかと言う競争の論理があるのだ。彼女に必要であったことは、こう言った男性的に生きるとか、男に負けないように生きると言う、究極的には女を否定することになる視点ではなく、女としての自分の生き方を模索し、発見することなのである。

こう言った彼女に、自分を見つめ直す機会が具体的に与えられる。それは、まず、彼女が Moses によって「らい病」に罹けられることである。“Everybody shrank away from her in terror and disgust” (Hurston: 1939, 301) とあるように、今まで彼女に同調していた人々が彼女を恐がって離れて行くのである。「らい病」と言う目に見える形で、彼女の持つ内的悪が象徴的に提示されたことで、人々は彼女の恐さを知るのである。それと同時に、大切なことは、「らい病」に罹った彼女が人々から離され、キャンプの外に追いやられ、孤独な状態にされていることである。この時に持つ彼女の孤独感は、Moses 自身が宮殿で持った孤独感と同じものである。自らより発する自らの偽りの姿を人々に投影し、そこに映し出される姿を感知して、偽りの姿を自分のあるべき姿として捉えていた Miriam には、人々と切り離されることによってそれが不可能になり、自らの姿を直接的な形で見つめなければならない状態になっているのである。それにより、Miriam 自身は、自分の外見に表れた「らい病」により、心の「醜さ」が表出している様を自分の目で確かめ、人々が去って行くことで、更に、それを確認することになるのである。内面に目を向けることが出来るようになったが故に、彼女は “Nothing don’t never surprise you. You know everything beforehand. You know, but you let things happen for reasons.” (Hurston: 1939, 318) と Moses にも、自分の弱さを認める発言が出来るようになるのである。

彼女が死を「選ぶ」ことにも意義がある。それは今まで、支配するための手段としての「男」と言う競争相手であった Moses との争いを止めるということになるからである。即ち、彼女の死には、男を中心としたエジプト社会の力による支配の論理を投げ捨てる意味が含まれているのだ。死は確かに自己破壊的だが、自らが死を「選ぶ」と言う行為によって、彼女は naked になり得て、心が解放されたことを示しているのである。

Howard は人間の解放には力が必要だと Hurston が言っているようだという。

Here, as in her autobiography, Hurston seems to feel that force is necessary to any kind of successful liberation, even in a religious context. For people, no matter who they are, will constantly strive to keep their leaders, as well as each other, down.

(Howard, 129)

Moses は強力な指導者であったことは間違いない。しかし、Moses 自身、自分は power は使っても force は使わない (Hurstons: 1939, 109) と言っていることをどのように考えるかである。作品中、紅海を渡った後の Moses が force を使うのは Jethro を守るための、いわゆる、盗賊達との戦いと、Hebrew 達を追って来た Pharaoh 軍との戦いと、イスラエルに向かう途中でのいくつかの種族との戦いである。彼の力の行使は、Pharaoh のような勢力拡大や保持のためのものではなく、全て誰かを守るために行われている。そういう意味で、彼が戦闘につき込んだ力には肯定的意味が持たされているのである。それに、神的な力を持っていた Moses が何故、40年近くも Hebrew 達に苦難の旅を強いるかである。力による指導を彼が心に描いていたとするなら、Pharaoh 軍を壊滅したように、力による Hebrew 達の指導が可能であった筈だ。元々 Hebrew 達の中には、力による指導を受け入れる精神構造が出来ていた訳で、力による押しつけを Moses が仮にしたとしても、彼らは容易に Moses の命令に従い、Moses の考える Hebrew 像を造ることが出来た筈である。それに、要所要所で指導的立場はとって、絶えず Hebrew 達と距離を保とうとするのは何故かである。Hurstons は Moses に Hebrew 達を力によって解放しようとしているのではないからである。

Moses は次のように気付いていたのだ。

He had found out that no man may make another free. Freedom was something internal. The outside signs were just signs and symbols of the man inside. All you could do was to give the opportunity for freedom and the man himself must make his own emancipation. (Hurstons: 1939, 344-45)

自由かどうかと言うことは、その人本人の心の問題だと言うことである。だから、外側からの力で支配したり解放したりすることは、不可能なことなのである。

だからこそ、一人一人の心の解放が大切になるのである。心を囚われるのも解放されるのも、その人次第なのである。Moses の期待は、“Over the river they would till fields that they had not cleared and dwell in cities that they had not builded.” (Hurstons: 1939, 346) という描写に表されているように、彼らが自らの解放を自らの力で成し遂げることなのである。

しかしながら、Hurstons はこう言った形での自己解放を決して楽観視している訳ではない。自分の身元や考えていることに不安を持ったり、孤独を感じたり、自分を見つめ直す機会を持つことで、心を囚われた人々は解放される資格を得ただけだからだ。Moses は自己解放直前

の、即ち、ヨルダン川を渡るだけになった Hebrew 達を Nebo 山から見下ろしながら次のように言う。

“This freedom is a funny thing .... It ain’t something permanent like rocks and hills. It’s like manna; you just got to keep on gathering it fresh every day. If you don’t, one day you’re going to find you ain’t got none no more ....” (Hurston: 1939, 327)

これは自己解放と言うものがいかに困難かということを示している。Hebrew 達が肉体的解放を得た後、40年近く放浪を続けざるを得なかったことを見ると、本当の心の解放は容易ではないことが分かる。それは、彼らの中に支配者側の論理が、当然の基準として、根付いていることに加えて、果たされない長年の戦いの中で、諦めや無力感が生まれて来て、心の自由のために戦う意欲を失い、抑圧を甘受する傾向になり易いからである。そのため、絶えず厳しい自己への目を向けることを怠ることは許されないのである。

Hebrew 達には、ヨルダン川の向こう岸に自由が待っている筈だ。しかし、Moses は彼らが川を渡るのを見届けることなく、姿を消すし、我々読者もヨルダン川を渡る彼らも、渡った後の彼らも見ることには出来ない。渡りきったかどうかは Hebrew 自身が知ればいいことだからだ。

## 5 Moses の得る力

エジプトより Hebrew を救出し、約束の地に向かう途中で Moses は “We got the outside stuff to take it, but I ain’t positively sure we got the insides yet.” (Hurston: 1939, 304) と、彼が最も信頼する Joshua に言う。迷える Hebrew に対して、Moses は Mt. Horeb で神と交信した後も、何度か神と接する機会を持つ。何故、彼は神の声を聞くことが出来たのか。また、自然との関わり方についても、同じことが言える。magic を使えるのは彼だけであり、lizard や自然の生き物と対話が出来のも彼だけである。この作品では “... he wasn’t sure he had succeeded.” (Hurston: 1939, 344) とあるように、最後まで、彼は迷える人物のように一方では描かれながら、他方では、特別な人物として描かれているように見える。確かに、Rayson (6) や Howard (130) の言うように、Moses は *Jonah’s* の John や *Their Eyes* の Tea Cake より “greater qualities” を持った人物である。彼らがそう言う時、John は彼の中のアフリカ性を認識し、それを具現化して行くが、Moses は John 以上に見事に実践しているという見方をしているからであり、Tea Cake の持つ既成の概念に縛られない自由な発想と

行動力を Moses が持っていると言う読み方をしているからである。

*Jonah's* を書く時も *Moses* を書く時も、アフリカ的な源が黒人の中にあると言う認識がベースになっていることは確かである。特に、*Jonah's* ではアメリカ黒人の中にアフリカの文化が受け継がれて来ていると言うことが明確に示されている (Hurstons: 1934, 59-60)。John の自己容認には、彼の中に受け継がれたアフリカ性が必要不可欠な要素であった。「逃げてばかりいないで、物事に直面しなさい」(Hurstons: 1934, 113) という Lucy の助言を受けて、自らと直面することで John は自分の中のアフリカ性を認識し、それを受け入れることで、人々に尊敬される説教師になれた、即ち、自己発展を進めることが出来たのであった。

黒人達の中に伝わる Moses の存在についても同じように、“reverent tales of Moses and his magic” (Hurstons: 1938, 116) は、アフリカに起源があると言う認識を Hurstons が持っていることが “It is hardly possible that all of them sprang up spontaneously in these widely separated area on the blacks coming in contact with Christianity after coming to America.” (Hurstons: 1938, 116) から分かる。また、*Moses* の “Author’s Introduction” でも、黒人の間に伝わる Moses は Damballah のことで、それは西アフリカのダオメ共和国に起源を持つと言っている。

In Haiti, the highest god in the Haitian pantheon is Damballa Ouedo Ouedo Tocan Freda Dahomey and he is identified as Moses, the serpent god. But this deity did not originate in Haiti. His home is in Dahomey and is worshipped there extensively. (Hurstons: 1939, xxii)

知識欲旺盛だった Moses に、知識が豊富である筈のエジプトの priest 達は何も答えてくれなかったが、ごくありふれた人物の老馬丁の Mentu は Moses の発展の基礎を授けてくれる。

“... And, Suten-Rech, don’t forget what I told you about the monkeys and the snakes. It might be true, you know. The old folks often know things you can’t find in a book.”

“Oh, I won’t forget anything that you have ever taught me, the sayings, and the proverbs and all. They have helped me a lot.”

“You are right to listen to proverbs. They are short sayings made out of long experiences.” (Hurstons: 1939, 82)



Mentu が Moses に教えたことは、昔から伝わる言葉の持つ力と言うことである。“... the images arose in the brain chamber of Mentu, the stableman, and stumbled off his lips and became real creatures to Moses— to live in his memory forever” (Hurston: 1939, 55) とあるように、Mentu が monkey を始めとして lizard や snake の話を Moses にして行くことで、Moses は成長して行くのである。Mentu から受け継いだ叡智は、更に、言葉として発せられることによって、Moses の中で増幅されて行く。それが Pharaoh と Moses との言葉合戦であり<sup>10)</sup>、Hebrew 達との対話である。しかし、宮殿で行われる Pharaoh と Moses との対話は、Mentu と Moses の間で行われるような昔話の、いわゆる、言葉遊び的内容ではない。これは Hurston が子供の頃、Joe Clarke の店先のポーチで聞いたような、いわゆる tall-tale の掛け合いではないと言う意味であるが、対話は潜在的及び形式的に言葉遊びの形を取っている。潜在的と言う意味は、tall-tale の場合に見られる語り手の意図的な虚勢（悪い意味ではなく、tall-tale の語りでは、そこが面白さの一つなのである）の張り合いの基本構図が見られると言うことである。Moses が水を血に変えれば、Pharaoh も同じことをし、蛙を Moses が出せば、Pharaoh も蛙を出すと言う、いわば、押し問答が繰り返されるのである。形式的と言う意味は、Moses と Pharaoh の対決が連鎖的に行われていると言う意味である。Moses と Pharaoh の対話やそれに伴う行動は、一方的に相手を無視する形で進められることはない。Moses が magic を使えば Pharaoh もそれに類する trick の magic を使って対抗する。ここで Pharaoh が武力を使って、Moses に対抗しようとするのではないのである。即ち、呼応する型式で二人の対決が行われているのである。こうしたことを繰り返す中で、Moses が力を得ていく様が描かれているのだ。これは Mentu から学んだ知恵を言葉として Moses が繰り返し使うことで、彼の中で本物の力となって来ていることを示しているのだ。そのため、Pharaoh と Moses との対決の繰り返しは、一見、単調に見えるが、Moses が言葉を繰り返すことによって彼の内に力を得て行くための、必要な繰り返しなのである<sup>11)</sup>。

同じことが Moses と Hebrew 達との間でも繰り返される。Hebrew を解放することを繰り返し Pharaoh に迫ったのと同じように、自分を解放するように Hebrew 達に繰り返し Moses は迫って行く。Hebrew 達との対話の繰り返しの中で、裏切りや不平や不満を目にすると、何度も裏切られる Moses は、一見、力を得ていないように見えるかも知れないが、彼の力は、言葉を使うことによって、確実に増加しているのだ。それは、彼が導く人々の数が確実に増加していることにも示されているし、着々とエジプトから遠のき、約束の地に近付いて行っていることにも表されている。こう言ったことは Moses の内面的力が増加していることの証なのである。

Mentu より受け継いだ言葉を使って、Moses が対話の中で力を得て行くことを可能にする

要素は、その言葉に伝統があるからである。Mentu は Moses に the book of Thoth<sup>12)</sup> を見つけ出し、読むように言う。

“To tell you the truth, I don’t know anything about it [the book of Thoth]. All I know is what I have heard. It was told by the father of the father of my father to the father of my father and the father of my father has told it to my father.” (Hurston: 1939, 73)

即ち、Mentu が Moses に語って聞かせた話は、いわば、天地創造の頃に遡る話なのである。それに “In the beginning ... there was neither nothing nor anything. Darkness hid in darkness-shrouded in nothingness.” (Hurston: 1939, 61) と Mentu が Moses に教えているように、語り継がれる伝統は、人間の恣意によって歪められていないのである。しかも、その伝統には人間にとって大切な純粋で絶対的な知恵が含まれているのである。

Mentu の果たす役割はもう一つある。それに関わることを Hurston は *Tell* の中で次のように言っている。

... if a memory is great enough, other memories will cluster about it, and those in turn will bring their suites of memories to gather about this focal point, because perhaps, they are all scattered parts of the one thing like Plato’s concept of the perfect thing. (Hurston: 1938, 118)

伝統と言う知恵を集約することの大切さを言っているのである。memory が memory として力を発揮して行くには “cluster” することが大切だと言うことだ。こう言う時の Hurston の頭の中には、伝統の知恵も大衆なくしては実現し得ないと言う認識があるのである。事実、Mentu の話を聞き、Koptos に行って the book of Thoth を読んだ直後の Moses は Zipporah に夢中で、大衆との関わりを持つことを避けていた。そのため、彼は力を発揮出来ていないのである。伝統の知恵を、いわば、無駄にしていた Moses に対し、大衆との繋がりを持つように Jethro が Moses を諭しているところがある。

“.... I hate to see you wasted on a woman. What goes for the everyday men does not apply to you. You have something that spoke to me from a distance. It can’t die and it can’t be hidden. You can’t run away from it and you can’t do away with it. It is a

glory and a tragedy. You are sentenced by fate to lead.” (Hurston: 1939, 35-36)

登場人物として、大衆との繋がりを持ち方と言う点からは、Moses は John や Tea Cake より優れた人物だと言うことが出来る。Moses には、獲得し、内在化している知恵を発揮するために必要な大衆がいるからである。

大衆との一体化の証として、導かれる人達の数増加などを挙げたが、Moses の方から大衆との一体化への積極的な動きがあることにも、注目する必要がある。エジプト王国のエリートとして育った彼は、教養ある人物であることは、彼の使う言葉が標準的英語であることに示されている。しかし、エジプト社会から離れた後に会った Midianite 族の中に住み始める彼は、Midianite の言葉をマスターするのである。更に注目すべきところは、Koptos に行って、the book of Thoth を読んで帰って来た Moses に盛んに、いわゆる、方言を使わせていることだ。特に、Hebrew 人を導いて行く時の彼は、方言を使う努力をしていることがはっきりと分かる。このことは、反発する Hebrew の老人が “he talks our language just like we talk ourselves” (Hurston: 1939, 251) と証言していることから、確認することが出来る。意図的に Moses が大衆との一体化を言葉によって成立させようとしていたことが分かるのである。

## 6 語り直しの意味

*Jonah's* の John の場合は、自分の中のアフリカ性の認識によって説教師として成功したかに思えたが、Hattie という女性との関係で会衆の信頼を失い、職を追われる。新しい地の Plant City で Sally という女性の助けで教会で説教をするようになるが、再び Ora という女性に手を出して、結局、最後は鉄道事故で死亡する。この結末は、結局、彼は内面に潜在するものの認識に至りながら、それに広がりを持たせることが出来なかったと言うことである。その最大の原因は、彼と大衆との融合が見られないところにあるように思える。

*Their Eyes* の Tea Cake も同じことが言える。彼自身は最初から自由奔放な人物として登場し、従来の基準から解放された、いわゆる、自由人として Janie の前に現れる。Janie は彼となら幸せになれると思うが、結局、彼も最後は、犬に噛まれて、狂犬病に罹り、Janie を殺そうとしたため、彼女に殺されてしまう。彼の場合は John 以上に、彼の自由さを強化してくれる集団が、明確な形で、彼の周りに存在していない。彼自身はその自由さを謳歌しても、それが集団的な力として、広がりを見せることはないのである。

Janie にも彼女の新しい認識に広がりを持たせるための集団は存在しない。彼女は、いわば、

人生の全てを経験して、Eatonville を思わせる Jody と一緒に長年暮らした町に戻って来る。彼女は自分の経験を親友の Phoeby に語って聞かせるが、その後直ぐに、Phoeby のもとを離れ、一人になるための行動をとっている。読者は Janie の語る話が Phoeby の口を通して Hurston に繋がり、Hurston の筆を通して読者に広がりと言う期待を持つことは出来るが、彼女が経験で得た知恵が、彼女の中で強化されることを目にする事は出来ない。彼女の場合も周囲に集団がいないからである。

彼らに対して、Moses の周囲には彼の得た知恵を確実なものにし、それを伝えて行き、受け止めてくれる集団が、相互依存的に存在していた。彼の力はその大衆と言う集団を濾過することによって獲得されて行ったのである。Moses では Hebrew というはっきりとした集団を設定することで、構造上、語り手と聞き手の関係が明確になるように仕組まれている。しかも、*Jonah's* や *Their Eyes* と異なって、早い時期に Moses が個人として自己認識に到達し、語り手としての役割を果たし得る設定がなされている。こうすることで、今までの作品では、個人の認識に留まっていたことに、作品の中で、集団的広がりを持たせることを可能にしているのである。

この集団的広がりを持たせる時大切なことは、storytelling の方法である。Moses が語り手として Hebrew に、自ら得た知恵を伝えていると言うことを明確に示しているところは、Hebrew 人の一人の Joshua の存在である。Moses は Joshua に語りかけ、それは Joshua を経て広がって行くと言うことが、彼が他の Hebrew に語る言葉から分かるように描かれてある。聞き手としての Joshua が、Moses が変わって行ったのと同じように、語り手としての Joshua に変わって行く。その時の彼の語り手の姿をしてみる。

“Yes, that a tight fight. Something like the monkey and the bulldog. The monkey told his bossman that he whipped the bulldog all right until it come time for him to sit down. Then he told his bossman he might have got the best of that bulldog, but the more he sit down, the more he doubted it.” (Hurston: 1939, 341-42)

Joshua の民話を連想させる語りの口調は、Mentu や Moses が語り手として語った時の調子と同じであり、Moses の語りが Joshua を経て広がっていることを確認することが出来るころだ。

大衆的広がりは大切だが、それが必ずしも正しい方向に向かう訳ではない。Hurston にはそれは分かっていたようである。そのために、Hebrew の中に Joshua という人物もいれば、Miriam や Aaron という人物も描かれなければならない。特に、大衆的広がり方、別な言い

方をすれば、oral tradition の形成のされ方で注目すべき点は Miriam の嘘である。Hurston は Miriam の嘘の広がりを描くことで、口承伝統の広がりを “simulating” (Hemenway, 260) しているのである。“simulate” することによって、oral tradition の形成の過程を確認し、真実の確認が可能になるのである。そこに語り直しの価値がある。

Moses は自分が Hebrew かも知れないと言う不安を持っていた頃、次のようなことを思っている。

.... Long ago, before he was twenty, he had found out that he was two beings. In short, he was everybody boiled down to a drop. Everybody is two beings: one lives and flourishes in the daylight and stands guard. The other being walks and howls at night. (Hurston: 1939, 82)

彼は自分の中に善的な面も悪的な面も両方存在しているということに気付いていたということである。

Hurston にこのような描き方をさせる背景には、当時の彼女の文学に対する否定的傾向を含めて、ブルジョア黒人に対する彼女の批判的見方があったからでもある。

Consequently, allegory though it is, *Moses* is also satire. Both witty and profound are Hurston's observations about black America with its, as it seemed to her, regrettably wide and deep division in loyalties among its upper class, its black bourgeoisie, and the Negro masses from whom her folklore came. The prominence of mulattos in the black bourgeoisie had not escaped Hurston's sardonic eye. (Jackson: 1984, xvii-xviii)

Hurston にとって、内的悪を乗り越えて行くと言うことが必要であった。そのため、John や Joe Clarke や Tea Cake を殺したように、Aaron や Miriam を殺すことを繰り返すのだ。同胞を殺すことで、自己の内の汚れた部分を認識し、それを自らの手で切り落としているのだ。このような内省的方法も語り直しによって初めて可能になって来るのだ。

語り直しの作業は共存の仕方を探求することでもある。Hurston の中には、無用な “Race Solidarity” (Hurston: 1942, 327) はなく、人種的枠で物事を考えようとするところはなかった。彼女は “How It Feels to Be Colored Me” の中で、“At certain times I have no race, I am me.” (Hurston: 1928, 154) と言っているし、*Dust* の中でも同じように人種的意識を越えていると言っている。

Light came to me when I realized that I did not have to consider any racial group as a whole .... I learned that skins were no measure of what was inside people. So none of the Race cliches meant anything any more. I began to laugh at both white and black who claimed special blessings on the basis of race. Therefore I saw no curse in being black, no extra flavor by being white. (Hurstons: 1942, 235)

また、他のとこれでも “...I had no need of either class or race prejudice ....” (Hurstons: 1942, 323)とも言っている。このように、人種的枠組みで物事を捉えていないと繰り返しているのだ。

Moses という存在についても、アフリカの起源を認めながらも、そのアフリカ性を弱める傾向、即ち、人種的枠組みを取り払おうとする狙いを持っていることが窺える。

And this worship of Moses as the greatest one of magic is not confined to Africa. Wherever the children of Africa have been scattered by slavery, there is the acceptance of Moses as the fountain of mystic powers. This is not confined to Negroes. In America there are countless people of other races depending upon mystic and seals and syllables said to have been used by Moses to work his wonders. (Hurstons: 1939, xxii)

Hurstons のこのような認識の中に、Moses の identity の不安が解消されないままになっている理由を見い出すことが出来る。*Jonah's* の John は African American として、アフリカに identity を見い出すことで自己発展をした。即ち、彼は、identity の不安の解消を人種的枠組みの中で行ったのであるが、Moses は Hebrew 人なのかエジプト人なのかと言う identity の不安の解消を人種的枠組みの中で行っていない。John の辿った道と同じ不安の解消の道を進むなら、彼はエジプト人か Hebrew 人かと言うことに関して結論に達することで、不安の解消をする筈であるが、彼の持っていたその不安の源は解消されないままになっている。それでも Moses が力を得ていると言うことは、人種的枠組みではないところに解決の道があることを物語っているのである。

人種的枠組みを持たない Hurstons は、それに基づく過去の抑圧等に対する復讐も、当然否定の対象にする。*Moses* で Pharaoh は過去に於いて、Hebrew 人がエジプト人を踏みにじったため、その “huge debt” (Hurstons: 1939, 32) として、償いをしなければならないと言う。このような人種的枠組みで復讐を行っている Pharaoh のような考え方を Hurstons は否定する

のである。

.... For me to pretend that I am Old Black Joe and waste my time on his problems, would be just ridiculous as for the government of Winston Churchill to bill the Duke of Normandy the first of every month, or for the Jews to hang around the pyramids trying to picket Old Pharaoh. (Hurston: 1942, 284)

Moses は人間は始めから “mixed” なのであり、人種や階級で区別することは出来ないのだと言っている。

“.... Haven’t we had the mixed multitudes with us ever since we started from Egypt? Didn’t they march out with us and not one soul in Israel has ever mentioned the subject ....” (Hurston: 1939, 299)

Moses は Hebrew 人だと言う動かし難いと考えられていた見方を、語り直すと言うことで、エジプト人かも知れないと言う新しい可能性を造り出し、過去の固定観念に疑問を投じることになる。しかも、最後まで、Moses はエジプト人なのか Hebrew 人なのかと言う問題に決着を付けないことで、Moses という人物にエジプト人も Hebrew 人も接近出来ると言う広がりを持たせることが可能になるのである。そうすることによって、人々は今までの固定的観念から解放されて、“a loose rein” (Hurston: 1939, 340) を持ち、“a well-blended mash of something of all the people and all of none of the people” (Hurston: 1939, 340) という “mixed” な状態になれば、共存の可能性が出て来る。

語り直しは基本的に “mixed” への作業であると言える。なぜなら、第一にそれには、必ず語り手と聞き手が相互に必要であるからだ。語り手のいない語り直しも、聞き手のいない語り直しも存在しない。そこには、共存への可能性が広がって来る。第二に語り直しは、無限な広がりを持っていると言うことである。例えば、一人の語り手から一人の聞き手に行われた語り直しは、一人の聞き手が語り手になり、次の聞き手に行われ、その次の聞き手は語り手になって、次の聞き手に語り直しを行うと言う、相反的に限定される役割を越えて、無限に広がって行く可能性を秘めている。即ち、語り直しは差別や抑圧を造り出す支配者对被支配者とか強者対弱者と言う限定的役割を根本的に設定出来ない状態を造り出すことなのである。ここにも、共存の可能性を見て取ることが出来る。

聖書と Moses が大きな違いを見せているところは、Hurston が Moses の話から Hebrew

性を薄めようとしているところである。全体の話の流れは聖書に沿っているが、聖書に出て来る Moses の割礼のことや Hebrew の系譜や儀式、法などの記述は Hurston の場合は全く描かれていない。聖書では、Miriam と王の娘との対話もあるし、Moses を育てるために Jochebed が赤子の Moses を一度引き取って乳を与えて、成長した Moses を王の娘に返している。そして、初めて王の娘の子となる。ところが、Hurston の場合は、一度、宮殿に連れて行かれた Jochebed の子供は、成長するまで Hebrew と接することはない。

Hebrew 性を薄めることによって、聖書に表されている Moses の lawgiver としての宗教的役割は弱められるのである。Slomovitz の言う、Moses の “interpretation of the ethical contributions” (Slomovitz, 1504) が Hurston には出来ていないと言う読み方は、聖書の Moses が ethical contribution をしているのに、Hurston の Moses にはないと言う批判であるが、それを薄めることが Hurston の狙いなのである。そのため、Rayson が “Not imbued with the religious sense of his mission” (Rayson, 5) と言うように、Moses には聖書の Moses に与えられていたような宗教的使命はないのである。

Moses から宗教的使命を薄めることで、どのような新しい Moses 像が生まれたかである。それは Hutchison の言葉を借りれば、“a very living and very human person” (Hutchison, 21) が生まれたのである。例えば、聖書では Moses が直接読者と初めて接するのは、成人になってからで、Hurston の Moses にも描かれている Hebrew 人を鞭打っているエジプト人の foreman を殺す時である。その後、Pharaoh から逃れて、Midian に行き Zipporah を妻にするところまで一気に進み、Mt. Horeb で神と接する場面になり、神との対話が始まる。これに対し、Hurston の Moses には人間臭さが出ている。既に、彼も囚われ人の一人だったと説明したこともそうだし、子供の頃の Mentu という馬丁と行う対話、彼の自分は Hebrew 人なのかエジプト人なのかと言う不安と悩み、Pharaoh から逃れた後、Zipporah という女性に溺れそうになり、Hebrew を救うと言う使命から逃れようとするところ、神に Hebrew を救出するように言われても、自分には出来そうにもないと何度も躊躇いを見せるところ、エジプトより Hebrew 達を約束の地に導く途中に何度も彼らを導くことを止めようと思ひ悩むところ、などなど、全て彼は普通の人間とあまり変わらないと言う視点で描き直されていると言える。これは Moses を “demystify” (Hemenway, 262) することで、彼の持つ “human qualities” (Hemenway, 262) を明確にしようとする狙いを Hurston が持っていたからである。

既に紹介したように、Locke は Moses を評して、“caricature” (Locke, 7) と言い、Turner も “comedy” (Turner, 111) として批判的だった。彼らが作品を否定的に見ている理由は、当時の黒人文学のあるべき姿は、Richard Wright を中心にした抗議を重視する文学的傾向が背景にあったからだ。そのため、Ellison が黒人文学として書かれるべき方向性として



示しているものは、“overcoming the social and cultural isolation of Negro life” (Ellison, 22) で、それは “awareness of the working class and socially dispossessed Negro.” (Ellison, 22) を意識したものでなければならないと言うことなのだ。即ち、黒人に対する「社会的環境」を把握し、それに対抗するものが書かれるべきだと考えられていたのである。ところが、Hurston の書いたものは黒人に不利な「社会的環境」を意識したものと言うより、黒人が否定される時利用される、黒人大衆の文化的面が中心になっていたのである。ここで Jackson のコメントを見てみる。

... its *vade mecum* throughout its entire length is laughter. Its constant solvent for any of its possible hypertension is comedy .... Never, in *Moses*, does Hurston lose the capacity of detachment from her material which permits her the aesthetic distance in her stance as an artist that she must have to employ comedy. Never does her sense of humor fail to invest her account of Moses with the accomplished ease of manner and the universality (whatever that is) so often said to be absent from protest literature. (Jackson: 1984, xix)

Locke や Turner が否定の根拠にしている面そのものが、Hurston が表そうとしていたことなのである。“caricature” 的で “comedy” 的にすることこそ Hurston の狙いであったのだ。例えば、Moses が Koptos であったことを Jethro に話す時の内容は、昔話を聞く時のおもしろさがあるし、それを話す Moses も、それを聞く Jethro も楽しんでいるのだ。また、宮殿に行って Moses が行う様々な magic の描写にしても、それに対抗することに必死なる Pharaoh や priest 達の姿にしても、喜劇的で娯楽的要素を持っている。昔話の内容の持つ滑稽さ、それが語られるのを聞く時の楽しさが込められているのである。

語り直しによって、Moses を他の登場人物と同じレベルの普通の人にすることで、Moses と他の登場人物との距離を狭めようとしているのだ。lawgiver で雲の上の人だった Moses と登場人物との距離が狭まるのを目撃する読者には、自分と Moses との距離も、作品全体との距離も狭まって来ることを実感出来るのである。その時、作品は Hurston によって読者に語られていることが分かって来る。読者は単に舞台の上で演じられる Moses の世界を観戦しているだけでなく、その世界に加えられて行くのである。

作品で明らかに説教を意識したと思える描写の仕方がしてあるところが二カ所出てくる。一つは、Moses が一回目に紅海を渡る時を描いた、“cross over” が繰り返してあるところと、もう一つは、Moses が Hebrew を率いて、Sinai 山の麓に着いた時を描写したところである。

到着の次の日、Moses は Sinai 山に登って行く。

Next day at a good hour, Moses went up on the mountain as if he had been called. The shining mountain. The mountain with a Voice. The mountain that cloaked the Presence. The mountain that had given Moses and Israel a God. The mountain that had given him his rod of God. The mountain that was the altar of the world. That was the way Moses was thinking when he climbed up its woody slopes with Joshua following behind him at a distance. (Hurstons: 1939, 277)

“cross over” のところと同じだが、ここでも “mountain” が繰り返されていて、明らかに説教を意識した調子で書かれていると言える。説教をするのは Hurston であり、それを聞くのは読者なのだ。

このようにして、Moses 対 Hebrew の構図は Hurston (作品)対読者と言う構図にもなり、Moses や Hebrew が学んで行くことは、読者にとっても学んで行くべきことと言うことになる。Moses が Hebrew に自由とは “something internal” (Hurstons: 1939, 344) と迫ったように、Hurston は読者に迫っているのである。

## 7 お わ り に

*Moses* が出版された1939年とは McDowell の指摘の通り (McDowell: 1991, xiv), Hitler が Poland に侵攻し、第二次世界大戦が勃発した年である。Hurston の中には、おそらく、こう言った歴史的流れが頭の中にあったことだろう。Pharaoh の Hebrew に対する抑圧は、Hitler によるユダヤ人大虐殺と重なって見えたであろう。また、ドイツ民族に対する “eugenics” がナチのユダヤ人抑圧の思想の基礎になっていたのと同じものをアメリカに於ける人種差別に見出していたことも想像するに難くない。だから、Ellison は *Moses* を “it did nothing” と酷評したが、抗議的な色彩がない訳でもない。Hebrew 達がエジプトの論理を受け入れる姿を追ってみると、抗議小説の形式の基盤であるアメリカンナチュラリズムに到達し、Clyde Griffiths や Bigger Thomas の顔が見えて来るからである。

Schmidt は作品は人間の抑圧を扱ったものだと言う。

... the novel deals with the history of human oppression— of power and powerless— that is transhistorical and, essentially, unchanging, as Hurston’s racial metaphor in-

tends to point out. (Schmidt, 195)

確かに、抑圧は歴史を越えて存在する。しかし、作品はそれを前提にして、その中に生きる人間の心を問題にしようとしていると見るべきである。作品の視点として、Pharaoh が Hebrew の抑圧者として描かれるのは4章の Jochebed が子供をナイル川に流すまでである。その後は Hebrew 達の内面の“slave mentality” (Hemenway, 259) に視点が移されて行く。そして、Moses の内面的葛藤、ついでエジプト脱出後の Hebrew と Moses の「神」と言うことを軸に展開されるやりとりへと続くが、流れは、心の自由を扱っているものである。作品の最後に次のような描写がある。

Moses felt happy over that. His dreams had in no way been completely fulfilled. He had meant to make a perfect people, free and just, noble and strong, that should be a light for all the world and for time and eternity. (Hurston: 1939, 344)

Hebrew の葛藤の40年は彼らだけの葛藤ではなく、万人に通じるものだという認識なのである。Hurston 自身も，“... this worship of Moses ... is not confined to Africa .... This is not confined to Negroes.” (Hurston: 1939, xxii) と言っていることもそれを裏付けている。

更に、Moses の妻の Zipporah に注目する必要がある。彼女の立場は他の登場人物と異なっている。まず、Moses が心酔する Jethro の娘であると言うこと、エジプトとは交流のない地に育っていること、しかも、力による上下関係によって成立していたエジプト社会とは異なった形態を持つ社会に育っていると言うことである。彼女は、Moses を始めとして Miriam や Aaron やその他の Hebrew 達とは全く異なる環境の中で育って来ている筈だが、彼らと同じように、外見を重視し、妬みを持ち、高い地位を求める意識構造を持っているのである。Hebrew 達の閉塞された心の状態はエジプト社会の基準が及ぼす影響と言うナチュラリズムの見方で説明が付いたが、Zipporah の場合は、それでは説明が付かない。ここに Hurston の狙いが潜んでいるものと思える。いかなる社会に育とうと、人間は一般に「墮落的野心」(Weidman, 536)に陥り易く、安易に行動しがちだと言うことなのである。人間の心の中には、歴史と社会的状況を越えたところで、硬直した不自由が生まれて来がちだと言うことを描き出すところに、Hurston の狙いがあったものと思える。

作品の全体的枠組みはアメリカ黒人の中に伝わるアフリカの口承文化であった。それは、Hurston の中に “absolute confidence in the Afro-American’s eventual attainment of freedom” (Watson, 49) があったからであるが、この confidence とは、人間全体に通じるも

のだと言う confidence なのである。これは、黒人イエスを描いた、John Hendrik Clarke の Aaron Crawford の持つ Black nationalism 的な confidence ではなく、Connelly が *The Green Pastures* で描く黒人 Moses でもないのである。このことは Hurston の Moses の心の発展の引き金となる Mentu という人物を Hurston が使っていることにも認めることが出来る。Mentu とは Shulman (Shulman, 53) によると、アフリカ語の “muntu” に起源を持ち、それは “human being” の意味だと言うことだ<sup>10)</sup>。アフリカ性を出発点にしながら、人間を考える方向性を Hurston は維持しているのだ。

### Notes

1. Grover Osgood に宛てた1935年12月29日付けの Hurston の手紙によると、彼女は “.... Must keep working on “MOSES” for my publishers and another book besides.” と言っていて、*Moses* にとりかかっていたことが分かる。
2. Hurston の作品では、父が説教師であったと言うこともあってか、聖書を基にした話がよく書かれている。“High John de Conquer” という短編では、crow に黒人を乗せて救出すると言う「脱出」のイメージで作品が書かれている。その他、聖書に基づいているものは、長編では、*Jonah's Gourd Vine* も *Their Eyes Were Watching God* もそうである。その他、短編では、“The First One: A Play” (1927) “The Seventh Veil” “The Women in Gaul” “Herod the Great” などである。“Herod the Great” の原稿は、University of Florida が所有しているが、燃やされかけたと言う経緯もあって、破損が激しく、完全な作品として読むことは困難である。他は現在入手可能になっている。
3. Locke は characterization が本物でないと言っている。全体的には否定的批評をしている Untermyer は、characterization は誉めているし、style も setting も一応の評価をしている。
4. Hurston のこの手紙をもって、直裁的に *Moses* の出来に彼女が不満だったと判断するのは早計であろう。最初にも説明したように、*Moses* への構想は1934年に始まり、1939年に最終的に出版されている。Osgood に送った手紙の中に書かれている “this book” がどの本かは明らかでないが、1935年の時点で *Moses* はまだ出来上がっていないからだろうと言うことを考えると、“this book” は最終的な *Moses* ではなかったと考えるのが妥当かも知れない。
5. それでも *Moses* だと言う暗示だけで、Jochebed と Amram の子供が *Moses* だと言う記述はしていない。Jochebed は子供を生んでエジプト軍に子供が殺される前にナイル川に流すが、その時までにも、その子に *Moses* と命名したと言うことも描かれていない。だから、にわかに Jochebed の生んだ子供が *Moses* だと繋げられない設定にしてあるが、暗示的に、その子が *Moses* と読者に感じさせる設定になっている。
6. Miriam の言っていることが嘘であることは読者には薄々分かるように書かれている。それは、Miriam の話す内容が、周りの人達と会話で行う彼女の言葉でしか示されず、語りの文では説明されない。また、テキストの後半に入って、成長した Miriam が地位欲しさから、*Moses* をエジプト人として扱うことで (Hurston: 1939, 282) Miriam の嘘が更に確認できるようになっている。
7. Schmidt は Miriam に関して、全く反対の読み方をしている。彼女は Miriam のことを外見重視の志向や伝統的女性の役割から脱却している女性として読んでいて、自立した女性で、作品でも Hebrew 人の宗教的伝統の面で重要な役割をしていると言っている。(Schmidt, 181) 確かにこう言った可能性を持った女性だったし、Miriam に「期待する読み方」も可能である。しかし、最後まで続く

Miriam と Moses との策略的確執や大衆や神との繋がりを Moses と比較した場合の Miriam の弱さをどう説明するのかと言うことなど、Miriam を自立した女性として捉えることには、作品全体のテーマと言う点からは無理がある。また、Gottlieb も Miriam と人々との絆の強さを強調している (Gottlieb, 35) が、説得力に欠ける。

8. Byers (137) も Hemenway (257) も Moses をエジプト人として認めた上で、Hurston の狙いは、聖書的 Moses が Afro-American の伝統の中にも生きていると言うことを示すところにあったと強調している。Turner (110-11) は、Moses は Miriam の弟ではないのに、Hebrew だとする話は、Miriam が fabricate したものだと言う。Wiedemann も “Egyptian-born” (Wiedemann, 311) と言い、Howard も “clearly an Egyptian” (Howard, 120) と言い、Slomovitz (1504) も Sheffey (206) も、同じく、エジプト人と言っている。

Moses という名前は Freud も説明しているように (Freud, 16)、エジプト語で子供と言う意味を持っている。また、ヘブライ語では、Moses は “to draw” の意味があり (木村, 228)、Moses という名前に「川から拾った子」と言う含意あることは確かである。しかし、こういう設定は Babylon を造った人の legend にも出て来るもので、特別な設定ではないと Hemenway (257) は言っている。

9. Hurston の狙いは従来の Moses は Hebrew だと言う説を、新たな視点で見直してみることにある。それは、そうすることで、彼女が他の作品でも行っているような、従来否定されているものを新たな視点で見直すことによって、新たな価値を見出しに行くと言うことが可能になるからである。この場合、Moses がエジプト人だとすると、アフリカ人だと言うことになり、アフリカ人だからこそ voodoo 教の呪術を使えると言う見方が可能になる。voodoo はアフリカのなものであるが故に primitive として否定されて来たが、Moses が演じるアフリカ性によって、アフリカのなものに再評価の機会を与えることが出来、新たに価値を認めることが可能になるのである。そのため、Moses の magic と priest 達の偽の magic が対比され、本物の magic である voodoo の持つ力が示せるのである。こうすることで、文化的にも歴史的にも否定されて来たアフリカ性を肯定的視点で捉え直すことが可能になって来るのである。

10. Boi はこれを Gates の言葉である “signifying monkey” という表現で次のように説明している。  
... the language of Pharaoh and Moses is pure taversty: their interchange is patterned on the “Signifying Monkey.” Both protagonists promise to perform the best trick, and they keep on giving appointments for the next turn to try. It is quite entertaining to see Pharaoh fall victim to his inability to see the vast difference between the tricks his priest pay and Moses’ demonstrations of power .... (Boi, 120-21)
11. Smith は “... she [Hurston] notes repetition, return, rhythm in our ways. This gives a folklore quality to her tale which the Negro cadence of her prose enhances.” (Smith, 2) と言って、繰り返しは黒人の folklore 的性格だと指摘している。また、Shulman も “repetition, parallel phrasing, use of lexical items, intricate word play for rhythmic effects” によって “jazzy rhythmic effect” (Shulman, 60) が生まれて来ている、アフリカの面を表している。これは黒人教会の “appeal-answer rhythm” の繰り返しと同じだと述べている。
12. Thoth はエジプト神話ではトトとして出て来る。体は人間だが、頭がヒヒのエジプトの神のことで、知識や学芸などの支配者である。Mentu によると、この本は Thoth が書いたもので、これを読むことで神に繋がることが出来、天地を動かしたり、自然のことが分かるようになり、power を得ることが出来ると言うことだ。(ギリシャ神話では Hermes にあたる)
13. Danille Taylor’s “Black Folklore” explains further the importance of African thought to the writing of Zora Neale Hurston as she refers to the African word “muntu” which means human being. While the word also has Greek roots in the more familiar word “mentor.” Taylor points out that in African Philosophy “mentu” is a concept and “concepts are expressed in terms of force.”

She explains:

There is a common stem “-ntu” which alters the meaning of words, such as human being (Muntu), thing (kintu), and place and time (hantu), to mean more than just a human being but a “force endowed with intelligence.” The “-ntu” gives all things a linking quality with a “universal force.” (This quotation is from Danille Taylor, “Black English in Black Folklore,” in *Black English: A Seminar*, eds. Deborah Sears Harrison and Tom Trabasso, Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 1976, p. 213) (Shulman, 52)

### Works Cited

- Boi, Paola. “Moses, Man of Power, Man of Knowledge: A ‘Signifying’ Reading of Zora Neale Hurston (Between a Laugh and a Song)” in *Women and War: The Changing Status of American Women from the 1930’s to the 1950’s*, edited by Maria Diedrich and Dorothea Fischer-Hornung. New York: Berg, 1990.
- Bradford, Roark. *Ol’ Man Adam an’ His Chillun: Being the Tales They Tell about the Time When the Lord Walked the Earth Like a Natural Man*. Harper & Brothers Publishers, 1928.
- Bradford, Sarah. *Harriet Tubman: The Moses of Her People*. 1886. Reprinted by Applewood Books, 1993.
- Byers, Marianne Hollins. “Zora Neale Hurston: A Perspective of Black Men in the Fiction and Non-Fiction.” Ph.D. Thesis submitted to Bowling Green State University, 1985. Reprinted by UMI, 1994.
- Carmer, Carl. “Biblical Story in Negro Rhythm” in *New York Herald Tribune Books* (November 26, 1939).
- Clarke, John Hendrik. “The Boy Who Painted Christ Black” in *American Negro Short Stories*, edited by John Hendrik Clarke. Hill and Wang, 1966.
- Connelly, Marc. *The Green Pastures*. 1930. Edited by Thomas Cripps, The University of Wisconsin Press, 1979.
- Dance, Daryl C. “Zora Neale Hurston” in *American Women Writers: Bibliographical Essays*, edited by Maurice Duke et al. Greenwood Press, 1983.
- Ellison, Ralph. “Recent Negro Fiction” in *New Masses* Vol.40. No.6 (August 5, 1941).
- Freud, Sigmund. *Moses and Monotheism*. Translated from the German by Katherine Jones, Vintage Books, 1939.
- Gottlieb, Lynn. “It’s Called a Calling” [Interview with Lynn Gottlieb] in *Moment* (May, 1979).
- Hemenway, Robert. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. University of Illinois Press, 1977.
- Holloway, Karla F.C. *Moorings and Metaphors, Figures of Culture and Gender in Black Women’s Literature*. Rutgers University Press, 1992.
- Howard, Lillie P. *Zora Neale Hurston*. Twayne Publishers, 1980.
- Hurston, Zora Neale. “How It Feels to Be Colored Me”, 1928. Reprinted in *I Love Myself When I Am Laughing ...*, edited by Alice Walker, 1979.
- . *Jonah’s Gourd Vine*. 1934. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1990.
- . “The Fire and the Cloud” in *Challenge* 1 (September, 1934).
- . *Mules and Men*. 1935. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1990.
- . “Letter from Zora Neale Hurston to Grover Osgood,” December 29, 1935. Hurston Papers at University of Florida Library.

- . *Their Eyes Were Watching God*. 1937. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1990.
- . *Tell My Horse*. 1938. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1990.
- . *Moses, Man of the Mountain*. 1939. Reprinted by University of Illinois Press, 1984.
- . *Dust Track on a Road*. 1942. Reprinted by University of Illinois Press, 1984.
- . *The Complete Stories of Zora Neale Hurston*. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1995.
- Hutchison, Percy. "Led His People Free" in *The New York Times Book Review* (November 19, 1939).
- Jackson, Blyden. "Some Negroes in the Land of Goshen" in *Tennessee Folklore Society Bulletin* 19(4) (December, 1953).
- . "Introduction" in *Moses, Man of the Mountain*, reprinted by University of Illinois Press, 1984.
- Kimura, Yasuo (木村康男). 『アメリカ人名事典ファーストネームの由来と歴史』北星堂書店, 1983.  
Translated from *American Given Names: Their Origin and History in the Context of the English Language* by George R. Stewart. Oxford University Press, 1979.
- Locke, Alain. "Dry Fields and Green Pastures" in *Opportunity* 18 (January, 1940).
- McDowell, Deborah Edith. "Women on Women: The Black Woman Writer of the Harlem Renaissance." Ph.D. Thesis submitted to Prudue University, 1979. Reprinted by UMI, 1988.
- . Foreword: "Lines of Descent/Dissenting Lines" in *Moses, Man of the Mountain*. Reprinted by HarperCollins Publishers, 1991.
- Rayson, Ann. "The Novels of Zora Neale Hurston" in *Studies in Black Literature* (Winter, 1974).
- Royster, Beatrice Horn. "The Ironic Vision of Four Black Women Novelists: A Study of the Novels of Jessie Fauset, Nella Larsen, Zora Neale Hurston, and Ann Petry" Ph.D. Thesis submitted to Emory University, 1975. Reprinted by UMI, 1994.
- Schmidt, Rita Terenhina. "'With My Sword in My Hands': The Politics of Race and Sex in the Fiction of Zora Neale Hurston." Ph.D. Thesis submitted to the University of Pittsburgh, 1982. Reprinted by UMI, 1986.
- Sheffey, Ruthe T. "Zora Neale Hurston's *Moses, Man of the Mountain*: A Fictionalized Manifesto on the Imperatives of Black Leadership" in *CLA Journal* (December, 1985).
- Shulman, Claire Zaner. "The Power of Speech in Zora Neale Hurston's *Moses, Man of the Mountain*." MA Thesis submitted to University of Florida, 1979.
- Slomovitz, Philip. "The Negro Moses" in *Christian Century* Vol.56, No.49 (December 6, 1939).
- Smith, Barbara. "Sexual Politics and the Fiction of Zora Neale Hurston" in *Radical Teacher* 8 (May, 1978).
- Smith, Margaret E. "Liberator Comes" [Review of *Moses, Man of the Mountain*] in *Boston Evening Transcript* 18 (November, 1939).
- Turner, Darwin. *In a Minor Chord: Three Afro-American Writers and Their Search for Identity*. Southern Illinois University Press, 1971.
- Untermeyer, Louis. "Old Testament Voodoo" in *Saturday Review of Literature* Vol. 21, No.3 (November 11, 1939).
- Watson, Carole McAlpine. *Prologue: The Novels of Black American Women, 1891-1965*. Greenwood Press, 1985.
- Weidman, Bette S. "Told in Idioms Black and Wise" in *Commonweal* (October 4, 1985).
- Wiedemann, Barbara. "*Moses, Man of the Mountain*" in *Masterpieces of African-American Literature*, edited by Frank N. Magill. HarperCollins Publishers, 1992.